



すみきり  
順

伊地知文庫  
文庫20  
341  
2



文庫20  
341  
2

七ノ下



28

伊地知氏書冊

部譜炭俵下巻



穉之部

秋のほろいづゆのなり  
月を教へては俵のなりと  
いふことなり

名月

明月也 見つるもみぬお下よと

湖春

名月也 様一取よハヤ 春の處

去来

家實こつと見初る月也外

荷子

名月也 誰か起す 蓮の傍

酒室

お信也 出たが揚り 江の月也

里東

りらぬの移のらくらよの月

行年

家こらあまこしと 月の月

去角

むさしの仲秋の月と

えはし 望みなり不書白紙候と

明月也 不こみゆと

去池

世のこふ花をておのほしむく  
星合よもしきおわかめ縁  
とよおあつらひりしあまの川

其角  
紙屋  
流石

壺若果の歌

こゝろにひらくうらふあわむらう

流石

跡をきほとよの終り多の月  
是の月ねごと門をくさるる

終り  
多の月  
其角

朝の

明国

朝のこもまの流きりすの江  
るるもいや日備あてり江の江  
こゝろもあまのこもりし

巻首  
利介  
流石

秋虫

手くんと暮るゝ　　さし　　さし　　さし  
 悔り人のとまれや　　さし　　さし　　さし  
 坊帳りくんと暮るゝ　　さし　　さし　　さし  
 こころきや著るゝ　　さし　　さし　　さし

康

不康のつしをえられぬ康  
 康

人のつしをえられぬ

康のふむ波や磯の折恒能  
 康

詠りのまよ

とほ塔や下りてきく康の長  
 康

草部

皇御郡の草花やまよしの花のお

担流

ふすきとくへらとくやまきしと

那巻

片雲の草や州より花の御

孫箱

草うらや島花掃くまうらる

むま

うまはし

草のちよきうらやまの草

まま

女中の草花をみく

草花の鼻のけいふらふらふ

草角

同草

草御やあまの草のくうら

草角

草角とくうらやまの草

草角

秋 抱 ぬ

柿のさくらあをふともあふさくら 行 牛

栗やまゝうらうらしおの 甲 結 甫

牡丹やあまの扱のぢうくし 本 作

菊ようてさくらさくらけの抱 結 甫

三十一のちを南まゝしとら  
これいほ世あえくひしとら  
も 未詳 うらうらさくらさくら  
ハらうらうらさくらさくら  
らんこのうらうらさくらさくら  
みなやけしうらうらさくらさくら  
あつてうらうらさくらさくら  
さくら(恨む)うらうらさくらさくら  
うらうらさくらさくらさくら  
うらうらさくらさくらさくら  
うらうらさくらさくらさくら  
うらうらさくらさくらさくら

結 甫

くわいのしよおちのらりとをいふ  
ちよわりのくみんをいふの  
ちよわりのしよおちのらり  
ちよわりのしよおちのらり  
ちよわりのしよおちのらり  
ちよわりのしよおちのらり  
ちよわりのしよおちのらり  
ちよわりのしよおちのらり  
ちよわりのしよおちのらり  
ちよわりのしよおちのらり

ちよわりのしよおちのらり  
ちよわりのしよおちのらり  
ちよわりのしよおちのらり  
ちよわりのしよおちのらり  
ちよわりのしよおちのらり  
ちよわりのしよおちのらり  
ちよわりのしよおちのらり  
ちよわりのしよおちのらり  
ちよわりのしよおちのらり  
ちよわりのしよおちのらり

石まき

ちよわりのしよおちのらり  
ちよわりのしよおちのらり  
ちよわりのしよおちのらり  
ちよわりのしよおちのらり  
ちよわりのしよおちのらり  
ちよわりのしよおちのらり  
ちよわりのしよおちのらり  
ちよわりのしよおちのらり  
ちよわりのしよおちのらり  
ちよわりのしよおちのらり



詠

丸腰ふらうぬや秋のころも

丸腰

水田その下や春ふの日の終

水田

碓いよりきき海ぬのころり

西堂

秋のくれらよ〜〜〜

秋

草のあや黄蘗も思ハ〜

秋

又虫のけハ秋〜

秋

〜〜秋ハ風〜

秋

秋ハ〜〜〜

秋

〜〜の片〜

秋

秋

冬之部

初冬

風やゆきふささいさよふのふれ	其角
市中や木の葉も落すよし風	秋流
冬風の微よと知りとあらは	芭蕉
梅もや流石よりし冬	公望
松の葉のふれりきや小松	新藤

川とあまのねのそらふむさふ	初美
風のそらふさき	孫吾
ゆきもや梅のしもと	冬如
田や <sup>三ノノキ</sup> あしとけり	八景
あまのこり	
まねのねまきわ	冬如
雪月よ、まのそら	初美

時辰

昔年の後つらしき事  
思ふや申の可ぬのり  
時辰

き道

わの昔の事よな

りぬを今もいふ事  
を物とらぬ  
新

結ぬ

小ねをぬるの向を  
む

大根引

海と入小根を  
大根引  
老

降さるを  
大根引  
新

外さるを  
大根引  
新

はむさよふか  
まへ

人あうの辰よとさるさし  
せ

あはれ先務様もさわさし  
示

あまやうめもさるさし  
利

まうとさうしてさし  
初

まうとさうしてさし  
里

右のころそさ川のさる

さるさるさるさる

さるさるさるさる

...

...



題不知

ある—この物—おのれ

聖人  
呂氏

とこと事や物事のいゝる

老道

後門のき—をいみり

行六

水火焼のらとぬ

船月

白うものちりき

と道

楷のちやあつ—方の五

みヤ

度中や—に大龍の

妙身

所と所

縁地—し—神—

其身

あ—降—さ—ち—は—

全

煙もくハ己ら棚つゝ火エ	世道
旗押さへりどくハよ休	平中
所つゝやえねとるる海	少江
山外の見ゆよあゝ	高名
行もや来りしるちり	智内

新

このれを又くちあし	杉風
とうまをぬきうのむか	李中
あしよせてとらつね	智内
福ゆくのりどくし	孤庵
ういのぬハ	後翁
手のくれ	少江

老道りの多うくれのう

いしきき一書之か

化取しはかき一

ま

わいよいまとうんぬん

西



詠諧秋之部

其角

秋のさむき上の枝より新乳はら  
 かくれて一羽 ぬりぬり 春  
 多き方又日傭 物々 貝吹か  
 月のほろし 口扉の 川  
 波父うまの 舟柳と 波よらわこ  
 つまひるよハ丸えころそり  
 孤  
 全  
 其角  
 全  
 其角

下京ハ宇保の 暮おこつて  
 帰るの 暮も 暮も 暮も  
 是頃の 暮も 暮も 暮も  
 之吹く 暮も 暮も 暮も  
 甲の 暮も 暮も 暮も  
 暮も 暮も 暮も 暮も  
 川 暮も 暮も 暮も  
 暮も 暮も 暮も 暮も



書

歳徳

十七

小舟を流すに  
舟を流すに  
舟を流すに

其  
舟

舟を流すに

舟を流すに

舟を流すに

舟を流すに

舟

舟

舟

天也氏思り

此所

石くち拾ひあつてし事なるま  
 へんしとのそふれ世は  
 八月におへるものとすりかへ  
 時のかまて初めはるる  
 初まわらふあつて思へてし  
 つよはりしるるあつてし

此所  
 此所  
 此所  
 此所  
 此所  
 此所

石の系そしる人かまへしる  
 出くち拾ひも長谷のそしる  
 手もと者もきりけりあまし  
 いらわきいりし日のそしる  
 石もふりしあつて思へて  
 へししるるし世の仁合  
 えるのとあつて思へて  
 石もくちわらへしる

此所  
 此所  
 此所  
 此所  
 此所  
 此所  
 此所  
 此所

宗信下

十八

かなしうと念仏とくゆる 雲の心  
 野よつとつりまてあはれぬ  
 人の物負ふあはれぬとあはれぬ  
 かねやふしむ心子もあはれぬ  
 十一年の梅より柳はあはれぬ  
 ほんとのあはれぬとえはれぬ  
 實也とまて男新くあはれぬ  
 かなしうと念仏とくゆる 雲の心

利牛  
 利牛  
 利牛  
 利牛  
 利牛  
 利牛  
 利牛  
 利牛  
 利牛

七人の業をききし 舟の心  
 秋のよまきり月よりくくく  
 口くく老の心 舟の心  
 かなしうと念仏とくゆる 雲の心  
 かなしうと念仏とくゆる 雲の心  
 かなしうと念仏とくゆる 雲の心  
 かなしうと念仏とくゆる 雲の心  
 かなしうと念仏とくゆる 雲の心

利牛  
 利牛  
 利牛  
 利牛  
 利牛  
 利牛  
 利牛  
 利牛  
 利牛

利牛

名

横物一紙合一紙目録

初段

後を望んで今もわらわら

初段

髪を束ねて髪を束ねて

初段

先陣よしをゆえに入ふ

初段

ゆつよおきあつてはあつた

初段

ちりごと風のふりもあつた

初段

17

17

氷て日た

甲、川をくする具

芭蕉

振るの層らぐれしきんて

清しハヤミせむすも朝

夜海、柳の小ををりて

川とやふり月をみるま

おゆの舟を流るゝあまの風

新木のあまふのこゝろ

芭蕉

芭蕉

新午

芭蕉

芭蕉

洞の者をつとふりあまうけて

空しくくくくくくくくくくく

いとくくくくくくくくくくくく

淡いものくくくくくくくくくく

吹くくくくくくくくくくくく

肩立癖又くくくくくくくくくく

上をまの干葉刻もくくくくく

くくくくくくくくくくくく

新午

芭蕉

芭蕉

芭蕉

芭蕉

利平

芭蕉

芭蕉

絢ユキ賞ウツの七ナナつはらりハをるルつれレ 利年  
 潺シ尔ニ門カドあらみみりり石イシ五イ 孤コ屋ヤ  
 比ヒ誘ユのノ御ミ冠カももとと御ミ月ツキとと赤アカ  
 砂スナ小コ膝ヒザのノつつつつまままま 赤アカ年ネン  
 新ニ留リウのノ喜キももおおららつつくくままのノ上ウ  
 吹フととらられれらららららららららららららら 利年  
 川カハのノ岸キのノああらららららららららら 赤アカ年ネン  
 平ヘ地チのノききめめのノううらららららららららら 赤アカ年ネン

干ヒぬぬとと日ヒ向ムのノききくくらららららららら 利年  
 塙ノああららららのノ花ハナらららららららららら 赤アカ年ネン  
 美ミ月ツキのノ浮ウ世セととらららららららららら 赤アカ年ネン  
 又マタああらららららららららららららららら 赤アカ年ネン  
 どどこことと人ヒト海ウミのノああらららららららららら 赤アカ年ネン  
 ささららららのノここかかむむ姑メのノああらららららららららら 利年  
 中ナカらららららららららららららららららららら 赤アカ年ネン  
 登ノボりりととししらららららららららららららららららら 赤アカ年ネン



用也こし秋の聲のきこゆ  
経の響きの響をくくゆ  
ちほくと羊の揚場ヨウバのり  
月影よりのつゆのちりや  
こころのまのこころの中  
湯炭のちりをくらぬ  
利牛  
孤屋  
中  
芭蕉  
利牛

芭蕉  
孤屋  
利牛

各々台

芭蕉

枝尾

雪の松ぬき口みしと雪をこし  
 日のあふよへの赤とをらし  
 が雪をいふはくすかた  
 あつことしし大名の信  
 方ふあふ風もふかく為存也  
 雲をこしれてひるこ島化  
 石尾 菅直 子母 北野 利牛

雪谷の院いれと雪のふ  
 雲うらうらしし雪をこし  
 ことあてはれおしぬの松  
 くのそくし物のをけり干りの  
 竹の皮をきつて多きあのみ  
 物よりのきれぬのこくし  
 ふふあふ人しあふ脚の女  
 うらうらぬのこやうき色  
 雪谷 菅直 石尾 北野 利牛

千の月をがらして 寝 たちよ  
 脊中へのちり 思をもふハゆる  
 茶もりのさつて 上よあらしりて  
 川うらよふ 水結 けしよ  
 名 多しきとれて けしよ けしよの色  
 春戸へとれえよ へり みる  
 おふふふし 勢く と 疾し  
 永集めて へまのき 精也 口  
 くらん くらん くらん

静を操して 儀へ くらり とも  
 わさく ちとて 業代 のれ  
 ちかみ けしよ けしよ けしよ  
 こちり へちて 火を かわて みる  
 又けりとも 仏の 人言て けしよ  
 掛ちわし して 賢く けしよ  
 大坂の人 へきと けしよの 月  
 尾とこちん へ 徳母の けしよ入  
 御座 御座 御座

陽明抄下

てもちぬらぬ草のさゆのさけらわ  
 次の小部尾てつふむさうさ  
 釣重よりみてふれ、改ふさる  
 七つのはしりしりすむさうさ  
 太のちあさし内よ降しあし  
 男さしりささえらゆさ

三堀  
 利牛  
 名良  
 松尾  
 理流  
 守水

松尾 五  
 松尾 二  
 松尾 一  
 松尾 五  
 利牛 三  
 松尾 二  
 松尾 三  
 松尾 二  
 松尾 二  
 松尾 二  
 松尾 二

野波 三  
 石圃 二  
 名良 二  
 利合 二  
 信 二  
 名良 二

出火下

七三

撰者芭蕉門人

志古氏

野

坡

十名氏

孤

屋

池田氏

利牛

元禄七歲次甲戌

六月廿八日

誦諧炭俵下其之終

榮佳子

上八

京寺町通

井筒屋二丁目

江戸白銀丁

大十屋

藤

助

